中国南極観測国際シンポジウムに出席して*

山内　恭**

学生の民主化要求デモとそれに続く武力鎮圧以降，危機的状況が伝えられている中国であるが，去る5月8～12日，抗州市において「南極研究国際学術討論会（International Symposium on Antarctic Research)」が開かれた．中国南極考察委員会が主催で，抗州市にある国家海洋局の第2海洋研究所が世話役を担当した．出席者は，外国からはSCAR（南極研究科学委員会）代表など，招待者を中心に30名弱，中国国内からは100余名という，盛況な会であった．日本からは永田武・元国立極地研究所長のほか，案内が行き届かなかったせいか，極地研からのみ5名が各分野にわたって出席した．

前半の全体会議では，各分野を代表して，これまでの南極研究のレヴュー，将来計画などについて講演があった．気象関係では，オーストラリア気象局のN. Stretenが，「オーストラリアにおける南極気象・気候研究」と題して，南極探検時代のモーソン（1910年代）以来の南極気象研究の歩みを紹介し，この面での歴史の古さ，伝統を印象づけた．一方，イギリス南極調査所（BAS）のRycroftは，超高層物理学が専門であるが，「大気と太陽—地球間物理学」と題した話の中で，2/3以上の時間を最近の南極「オゾン・ホール」問題に費し，時代の趨勢を感じさせられた．中国極地研究所長董兆乾はじめ中国の代表からは，中国の南極研究の現状が紹介された．初めて中国人科学者が南極で越冬したのが1980年（オーストラリア・ケーシー基地），それから未だ日の浅い中国の南極研究である．しかし，南極半島キング・ジョージ島に長城基地を設け越冬を始めてから5年目，既に第2の「中山基地」（東南極アメリー棚氷近くの大陸氷床上）での越冬も今年から始め，着々とその地歩を固めている．このようなシンポジウムを行うことで国際的な交流を活発にし，中国の南極研究を盛り上げていこうという，強い意気込みを感じさせられた．

後半は，分科会形式で3会場にて，生物系，地学系，大気科学系に分れて行われた．筆者は大気科学系に出席したが，雪氷から超高層，気象と広い範囲にわたる発表が集められていた．雪氷関係では，ソ連Zakharov，オーストラリアJacka，日本の西尾（代読）の他は中国からで，蘭州，雪氷凍土研究所の謝自楚所長をはじめメンバーから多くの発表があった．長城基地近くの氷河の調査の話，研究所で独自に開発された400 MHzの可搬型のアイスレーダーの紹介，雪氷コアに基づく研究の報告があった．中国独自の本格的な南極雪氷観測は未だこれからの感があるが，オーストラリア隊と共同で行われたロードーム（ケーシー基地近く）での観測から多くの結果が得られており，オーストラリアが中国との協力にかなり力を入れている様子が印象づけられた．日本の観測隊（夏隊）に加わった張文敬の報告もあった．超高層関係では，日本からの発表が多かった他，アメリカ1件，中国4件の発表であった．

気象関係では，筆者の2件を含め，10数題の講演がなされた．中国の南極気象研究の指導的人物の一人である大気物理研の高登義（日本隊に交換科学者として参加），北京大学のYin Zong zhaoは，日本の観測隊のデータに基づいた話をした．さらに，中国の南極気象観測（定常，研究）を担当する中心となった国家気象局，気象研究院（AMS），極地気象研究室からは室長のLu Longhuaをはじめ4名が入れ替わり立ち替わり発表した．大規模な南極気候の話や中国の夏のモンスーンとその前年の南極長城基地の気象・気候がどう関係しているのか，といったテレコネクションの話．長城基地は年600 mm（？）と降水量が多くほとんどいつも雲に覆われ，南極というより中緯度の海洋性気候に近いという報告．長城基地に32 mの観測塔を建て，境界層の観測を本格的に行っていること，など，各種の話題が提供された．筆者の話した衛星による雲観測やオゾン，CO_2など微量成分観測については，まだ中国側の発表は無かったが，強い関心は寄せられ，今後大いに発展することが期待される．上記メンバーの1人もオーストラリア基地で越冬しているほか，日本の観測隊にも26次隊以来毎年，交換科学者として中国の気象研究者が派遣されており，

---

* Report of the International Symposium on Antarctic Research.

** Takashi Yamanouchi, 国立極地研究所.

国際的協力が強く求められている．単に形式的な協力ではなく，実のある，お互いに得るところのある共同研究を目ざしていく必要があろう．

何故に，いまだ南極観測に経験の浅い中国がこのような国際シンポジウムを開くのか（日本でさえいまだやっていない），外国からの参加者は皆いだいた疑問であった．蘇東坡の詩で有名な風光明媚な西湖近くの超近代的ホテルで開かれたシンポジウム．外の，朝昼晩の自転車と人の大洪水，超満員のオンボロトロリーバスとは別世界．シンポジウムの1週間を経て，何となく疑問は解けてきたような気がしたのであった．

気象学会パソコン通信（MSJ BBS）開局のお知らせ

このたび日本気象学会では理事会の承認のもとにパソコン通信のホスト局を開局しましたので，お知らせします．このシステムは，電子掲示板（BBS）を中心とした皆様の情報交換と，メールボックス機能による学会誌（JMSJ）の原稿受取を目的としたものです．

ホスト局の電話は　03-813-7844(24時間運営，年中無休)

通信パラメータは　通信速度　300/1200 bps
8ビット
パリティなし
ストップビット　1ビット
全二重
XON/XOFF 制御あり
SI/SO 制御なし

漢字コードは　シフト JIS, 新 JIS, 旧 JIS, NEC-JIS
いずれも可．

回線が接続されましたら，リターンキーを続けて2回押して下さい．（これ重要！）"Welcome to MSJ BBS !" のメッセージに続いてUID (METEO 050) とパスワード (GUESTUSE) などを入力しますと，オープニングメッセージが出てきます．

当システムにおける機能の概要は以下の通りです．

* 掲示板(BBS)：皆さんのフリートーク，情報交換のフォーラムです．学会からのお知らせ，最新情報も掲載されます．
* メールボックス：いわゆる個人間のメールとはやや異なり，パスワード付きの掲示板のようなものです．読み込み／書き込みにはパスワードの交付が必要です．学会誌の原稿受取に使います．

当システムはまだテスト運用の小規模なものですので，UID の可能登録数も50名に限られています．そのため当面はゲストユーザー（ID：METEO 050，PASSWORD：GUESTUSE）主体の運用を行う方針です．従って，ゲストユーザーでも掲示板に自由にアクセスできます．ただゲスト使用の場合は書き込み容量にシステム上の制限（一回2Kバイト，総量64Kバイト）があります．

頻繁に書き込みをしたい方，また学会誌の原稿送付に利用したい方には UID とパスワードの交付をいたしますので，御遠慮なく下記に御連絡下さい．

連絡先：村上勝人（日本気象学会担当理事）
〒305 茨城県つくば市長峰 1-1　気象研究所
（電話：0298-51-7111　内線 516)

当システムの開設にあたっては，まず「パソコン通信がどの程度利用されるのか？」という実験として，最初は掲示板1枚・個人メール無し，の小規模なシステムで様子を見ることになりました．利用実績を基に，一日も早くフルスケールのネットワークに昇格出来ますよう，皆様の活発な御利用をお願いいたします．